

めざすまちの姿と審議会の主な意見(第2部会)

分野	施策分野	めざすまちの姿	審議会の主な意見
環境	都市景観	○山々と河川が織りなす自然景観や北部地域の農村・田園景観、芸術文化に育まれた景観、それぞれが調和した宝塚らしい景観が保たれ、魅力を増している。	
	緑化・公園	○まちに花や緑があふれ、地域のニーズにあった魅力的な公園づくりが進み、住む人、訪れる人を魅了し、利用されている。	・プレイスメイキングという、公園や広場を使いながら、市民自らがまちを楽しくしていく試みが出てきている。活用されることで、保全にもつながっていく。そんな仕掛けを充実できないか ・提供公園があるがキャッチボールもできない。公園の有効活用を地域で話し合っている ・ボール遊び禁止等の公園が多い。子どもや若い世代が集え、高齢者も見守るようなことができたら良い(再掲)
	環境保全	○自然とのふれあいや学びを通して、環境への関心が高まり、自然豊かな環境が保全されている。 ○省エネルギーや再生可能エネルギーの導入が進んでいる。	・水田生態系が壊滅状態に近い。守っていく必要がある ・生物多様性、保全上、重要な里地里山として、西谷と中山台が環境省の里地里山500選に選ばれているが、市内でも認知されていない ・環境教育にすばらしい場所があるのに生かされていない ・緑に親しむ気風をつくるのが大切ではないか ・自然とどう共生していくかという視点は大事 ・市民とともに環境をつくっていく、守っていくというようなキャッチフレーズがあっても良い
	循環型社会	○ごみの発生を抑え、資源のリサイクルが進んだ循環型社会に向けた取組が進んでいる。	
	都市美化・環境衛生	○まちの美化活動により、清潔で快適な生活環境が保たれている。	
観光・産業	観光	○既存の地域資源を活用し、国内外へ宝塚ならではの魅力を情報発信することにより、訪れる人が増え、観光産業が発展している。	・面白い仕掛けやお店の情報をネットワーキングしていき、魅力を相乗効果でより高めていく戦略の方が、宝塚らしい観光産業ではないか
	商業・サービス業・工業	○宝塚ならではの産業が活性化し、その魅力が発信され、市内で買い物する人や働く人が増えている。 ○起業・創業が盛んになり、新たな産業が成長している。	・食品以外を購入する場所が少ない。高齢者になって車に乗れなくなると買い手が不便 ・大きな方向性として、大型店をめざすのか、宝塚なりのきらりと光る店、個性ある店をネットワークして、宝塚らしいにぎわい、産業活性をめざすかの大きく2つある ・近所の人も含めて、みんなで行って、支え合って少しでも夜遅くまで運営できる、そんな仕組みが必要ではないか ・市内に仕事を生み出すことができれば、楽しい夜のまちの創出につながる。働いている人がベースをつくっているという部分もある。まちのベースによって、観光、娯楽、購買も変わってくると思う
	農業	○「花き・植木」や「西谷野菜」など宝塚産の農産物が都市ブランドを形成し、農業を志す人が増えるとともに、市民が身近に「農」に触れている。	
	雇用・勤労者福祉	○多様な働き方が広がり、働く意欲を持つすべての人が安心していきいきと働いている。	・若者の貧困・就労の問題など、若者福祉がない(再掲)
	消費生活	○消費者トラブルの予防や対処に関する知識が広がり、自ら考え行動する消費者が増えている。	
文化・国際交流	○誰もが気軽に文化芸術に触れることができ、発信者になっているとともに、文化芸術と福祉や教育、産業などの連携が進んでいる。 ○国内外の文化交流の輪が広がるとともに、異文化への理解が進み、多文化共生社会が築かれている。	・文化芸術センターは、普段から子どもたちもふらっと立ち寄り、大人も一緒に楽しみ、そこから輪が広がっていく、そんな拠点にしていきたいと考えている ・文化・芸術を自分たちで掘り起こし、新しいものをクリエイティブしていくという視点が大事 ・神社仏閣や手塚治虫記念館、温泉、歴史文化などもアートでつなぐことができる。神社仏閣などもアートで、人が作り出した文化なので、そういうものも、アート・文化芸術と広く捉えるべき ・一人一人が発信者という要素を盛り込みたい。従来の既成概念にとらわれず、新しいものを売り出していき、一歩踏み出していき、そういうことがイメージできるような文言を盛り込んでほしい ・行政だけでなく、市民も含めて新たな情報発信媒体にアンテナを張り、みんながそれぞれで発信して、その力を利用できる仕組みをつくっていく ・五月台中学校の吹奏楽部は川西市のみつなかホールで発表会をしている。川西の市民に発信することができる。市内に小さなホールがあるなら、それを最大限に活用し、アートでつなぐ ・やはり、歌劇を大切にしたいし、育てたいと思う ・文化財をあちこちで活用して芸術回廊として結んでいくのはどうか	
都市経営	市民自治	○市民の「やりたい」ことができる環境が整えられ、市民主体のまちづくりが展開されている。	・自治会の運営の仕方によって、住民が関わりにくくなってしまっているところもある。もっとみんなが楽しく関われるようなやり方があるのではないか ・自治会加入率は下がる一方であり、もしなくなれば、テーマごとのアソシエーションが支える以外にない ・自治会だけでなく、マンション管理組合の参画も考えないといけない ・京都市のマンションの自治会加入率は70%。スプロール化は地域を壊すことにつながる(再掲) ・地域の組織が、地域の施設の運営をするという流れをもっと確立すべきではないか。一緒に地域を育て、施設を運営していくようなスタンスの契約の仕組みが必要ではないか。自治会やまちづくり協議会が収入を得て、やりたいことができるようになるなど、地域の組織の在り方を発展的に変えていく流れをつくる必要があるのではないか。 ・自分がやりたいところを担いながら、それがパッケージになるとすべてのまちづくり活動ができていくというような地域活動が展開できれば良いと思う
	市民と行政との協働	○協働の理解や取組が広がり、市民と行政がそれぞれの役割を果たし、連携しながら、まちづくりを進めている。	・人口減少していく前提では、第6次総合計画では、いままで以上に協働が重要になる ・市に考えていただきたいことは、市が行っていることを外に投げるだけで、協働、新しい公共と錯覚してはいけない。一緒にパートナーとして、共に変わっていく新しい協働であるべき
	開かれた市政	○情報共有と市民参画の充実により、対話と交流による市政運営がなされている。	
	情報化	○知りたい情報に容易にアクセスし活用することができ、ICTを活用して便利で豊かな生活が送れている。	
	危機管理	○危機の発生を防ぎ、発生した場合でも迅速に適切な対応をとれる体制が整っている。	
	行財政運営	○人口減少社会、少子高齢化など社会構造が変化する中でも、将来を見据えた行財政運営により、安定した行政サービスが提供されている。	